

保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミにおける 保育実践力の向上を目指して — 系列3園とのよりよい連携の在り方 —

Basic Childcare Seminars and Specialized Childcare Seminars enabling learners to
Acquire Practical Skills
～ How to improve cooperation with affiliated Kindergartens ～

増井啓子・阪本さゆり
Keiko MASUI & Sayuri SAKAMOTO

要旨

奈良保育学院では、令和5年度よりカリキュラム化された保育基礎ゼミ・専門ゼミを通して、学生の保育実践力の向上を目指して取り組んでいる。令和6年度は、ゼミの活動に協力している法人内の3園との連携をより充実させるためにコーディネーターを置き、学生にとっても3園にとっても効果的な内容となることを目指してきた。その連携の在り方を振り返りながら、学生の保育実践力がどのように向上しているかを明らかにするとともに、それを支える環境として、3園とのより良い連携の在り方を追究する。

キーワード：保育観察 幼児理解 ドキュメンテーション 連携 コーディネート

はじめに

奈良保育学院では、令和5年度より保育専門職課程における学生の保育実践力の向上を目的として、保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミという講座を設けて取り組んでいる。

2年間の履修課程の中に位置付けられた保育実習及び教育実習以外に、保育ゼミという年間を通した保育現場での学びの機会があることによって、学生たちの保育を見つめる眼は確実に向上し、一人一人が手ごたえを感じ取れるようになってきている。その背景には、学校法人白藤学園の傘下に存在する付属幼稚園・おおみや保育園・おおみやこども園の協力が存在し、連携・協力のための関係性構築を目指してきたことが、学生の資質・能力の向上に繋がっていると言える。

そこで、今年度は、まず3園との連携を円滑に行うためのコーディネーターを置き、学生の保育実践力向上の充実を図ることにした。そして、昨年度の取組から明らかになった3つの課題、①教育課程に位置付けられた授業時間の効果的な活用 ②学生が得た各園での学びの状況把握、及びそれを実践力向上につなぐための指導法の改善・充実 ③保育専門ゼミにおけるドキュメンテーションの作成とその効果を明らかにすることの解決に向けて取り組むことを目指したい。また、この取組を本学の強みとするための改善・充実を図っていこうと考えている。

I 保育基礎ゼミと保育専門ゼミの目的と令和6年度の実践の重点

1 保育基礎ゼミと保育専門ゼミの目的

① 保育ゼミを通して、学生にどのような力を身に付けさせるのか

幼児教育は、幼児の望ましい発達を期待して幼児のもつ潜在的な可能性に働き掛け、その人格形成を図ることを目指している。そのため、保育者は幼児期にふさわしい生活を準備し、その中で生まれる遊びや生活の中で様々なことを体験させることを通して、人と関わる力や思考力、感性や表現力等を育み、人間として社会と関わり、人として生きていくための基礎を培うことが求められる。また、幼児期にふさわしい生活を通して、幼児は身近な環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって主体的に環境に関わりながら様々な活動を展開し、感動体験を重ねていく。このような環境を通して行われる保育・教育の中で、幼児の発達が促されていくと言える。そのため、保育者には、幼児が遊びに没頭し充実感が味わえるような環境を準備することが求められる。また、その環境の中で、幼児と適切な関わり（援助や言葉掛け）を行う役割も存在する。

保育者を目指す学生は、このような保育者の役割を理解して、自分にできることや自分が成さねばならないことを判断し行動に移すことができるよう、知識理解とともに保育技術を身に付けることが求められる。また、幼児の思いや願いを読み取り受け止めることのできる感性や幼児理解力を身に付けなければならない。さらに、同僚や保護者との信頼関係を築き、幼児のために連携・協力を心掛けることも大切である。

保育者には、以上述べたような資質・能力を身に付ける手段としての豊かなコミュニケーション力も必要である。保育現場に毎週行かせていただき、保育観察記録を取りながら「保育を見る眼」を育み、人と関わる力・思考力・豊かな感性と表現力・コミュニケーション力・幼児理解力などの資質・能力を培うことを目指していきたい。

② 保育を観察し記録することの意義

子どもの健やかな成長を支える専門職としての保育者の役割を理解するためには、学生自身が実感をもって保育者の役割に気付くことが必要である。学生たちに「なぜ保育者になろうと思ったのか」を問うと、「子どもが好きだから」「子どもがかわいいから」という答えが返ってくることが多い。保育者の役割に気付き、保育者としての責任感や使命感を感じるためには、保育現場で実際にどのように保育が行われているのかを知り、当事者として自分がどのような姿に成長していくことが求められるのかについて、気付き考えることからスタートしなくてはならないと考える。つまり、学生の意識を高めるためにも、まず保育を観察し記録することによって、様々な気付きや学びを得ることの意義は大きいといえる。

また、「書くこと」に対して苦手意識をもつ学生が多いという実態もある。保育実習や教育実習を経験する中で、実習記録簿の作成に時間がかかったり、何をどのように書くかといふ基本的なことが十分理解できなかったりして苦勞する姿が存在する。

このような実態からも、観察実習を日常的に行い限られた時間の中で記録をまとめ、省察することを積み重ねていくことが必要である。そして、保育者の役割を理解し幼児を理解す

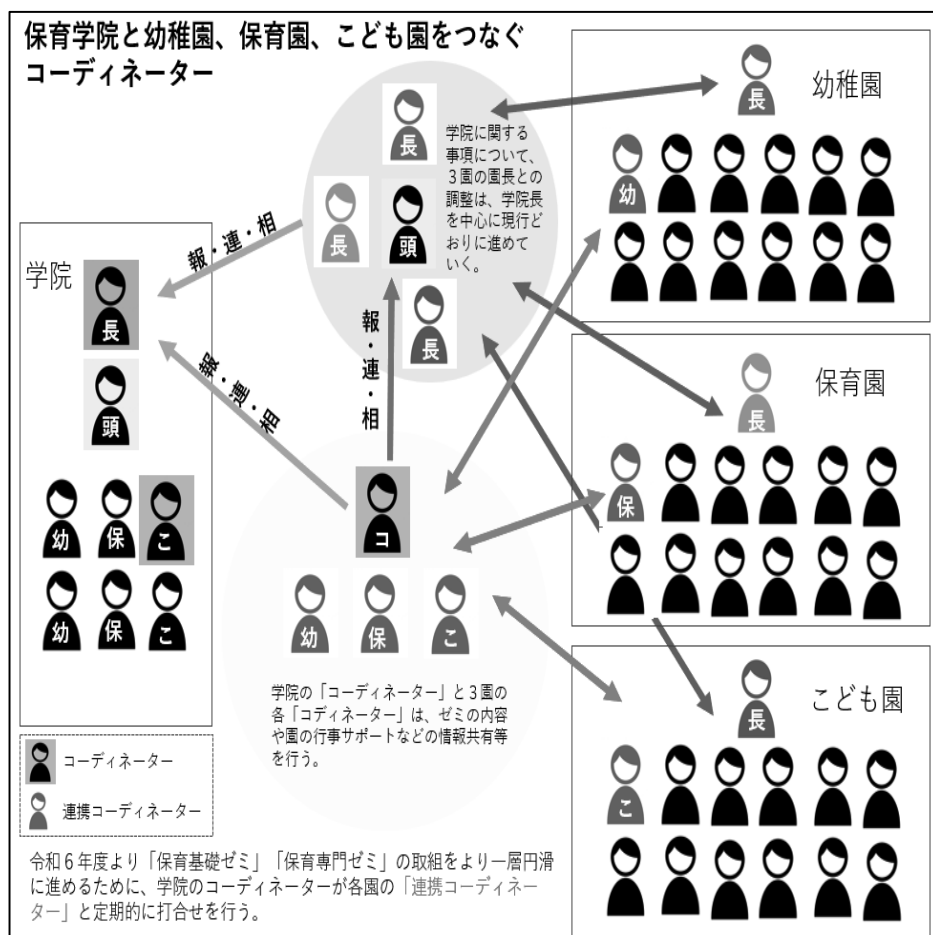
ることの大切さに気付くことこそが、専門性の向上に繋がると考えている。また、一定の期間を観察実習として位置づけることもできるが、年間を通しての関わりの中でこそ得られる様々な場面での経験は、就職後にも役立つ経験となると思われる。

2 今年度（令和6年度）の取組の重点

① 保育学院と3園をつなぐコーディネーターの設置

令和5年度の反省を踏まえて、今年度は、保育ゼミの充実と協力園とのより良い連携・協力体制の構築を目指して、コーディネーターを置くことになった。

令和5年度よりスタートした保育基礎ゼミと保育専門ゼミは、学院の6人の教員が2名ずつ3園に分かれて学生と共に各園に出向き指導している。初年度の取組の中では、「学院の教員間の情報共有不足」や「3園との連絡調整不足」「学生への指導内容や指導方法のばらつき」等の課題が残った。そこで、これらの課題を解決する方法として、コーディネーターを置き、保育ゼミの内容や方法と3園の保育計画との調整、園からの要請や要望への対応、学院と3園との情報共有等を行うこととした。（下記のイメージ図参照）



《コーディネーターの役割》

- 保育ゼミでは、観察実習（保育の観察・記録）を基本とし、協力園の要請に応じて環境実習や保育補助等にも取り組み、体験的な学びが得られるようにする。
- 保育ゼミ3グループでの指導内容や進捗状況の把握と調整、情報共有等を行い、保育ゼミでの学びが、効率よく効果的に積み重ねられるよう調整する。
- 学生の学びの姿を適切に評価できるよう、評価規準を設定し教員間での周知と共有をはかる。
- 学院と3園との計画のすり合わせ・活動の打ち合わせを行う。
 - ・連携・協力の関係性がよりよい形に発展できるよう調整する。
 - ・限られた時間をより充実したものにするための計画実施（報告会や発表会の計画・実施等）。
- 園からの要請や要望への対応として、学生への周知と調整を実施する。
 - ・園行事等への支援（引率補助等）
 - ・アルバイトやボランティアの募集等

② 令和6年度の保育ゼミの計画

今年度のゼミの計画は、下表のようになっている。1回生は保育基礎ゼミを月曜日に、2回生は保育専門ゼミを毎週火曜日に、3園に分かれて実施する。1回生は観察実習で取った記録をもとに、観察記録をまとめる。2回生は写真の記録をもとにしてドキュメンテーションの作成を行う。

2024 年度前期保育ゼミ予定			
保育基礎ゼミ 1回生		保育専門ゼミ 2回生	
月 日	1限	月 日	2限
① 4月8日		① 4月16日	履修カルテの確認 専門ゼミの趣旨と概要
② 4月15日		② 4月23日	保育を見る視点と記録の取り方・写真の活用
③ 4月22日		③ 4月30日	ドキュメンテーションの作成について
④ 5月13日	保育観察	④ 5月7日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑤ 5月20日	保育観察	⑤ 5月21日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑥ 5月27日	保育観察	⑥ 5月28日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑦ 6月3日	保育観察	⑦ 5月21日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑧ 6月10日	保育観察	⑧ 5月28日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑨ 6月17日	保育観察	⑨ 6月4日	保育観察・保育補助 ドキュメンテーションの作成と振り返り
⑩ 6月24日	保育観察	⑩ 6月11日	花いっぱいプロジェクト ドキュメンテーションの作成
⑪ 7月1日	保育観察	⑪ 7月9日	保育観察・保育補助 前期の振り返りとまとめ
⑫ 7月16日(火)4限	各園での学びの報告と振り返り		⑫ 7月24日(木)4限：各園での学びと振り返り
＊ 1回生の保育実習：7月22日～8月2日		＊ 2回生の教育実習：6月17日～6月28日	
保育基礎ゼミでは保育観察記録を取ることを中心にして、環境実習や保育補助等を各園との打ち合わせの中で、随時行う。		保育専門ゼミでは、保育観察を行いながら保育補助を行うとともに写真による記録を残し、ドキュメンテーションの作成を行う。	

2024年度 後期保育ゼミ予定表

保育基礎ゼミ(1回生)				保育専門ゼミ(2回生)			
	月日	1限	2限		月日	1限	2限
	9月9日			①	9月10日		後期専門ゼミの計画
	9月16日	敬老の日(振替休日)		②	9月17日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
	9月23日	秋分の日		③	9月24日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
①	9月30日	保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	④	10月1日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
②	10月7日	保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	⑤	10月8日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
	10月14日	スポーツの日		⑥	10月15日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
	10月21日			⑦	10月22日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
③	10月28日	保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	⑧	10月29日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
	11月4日	文化の日(振替休日)		⑨	11月5日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
④	11月11日	花いっぱいプロジェクト 保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	⑩	11月12日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
⑤	11月18日	保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	⑪	11月19日	保育観察・保育補助	ドキュメンテーション作成と振り返り
⑥	11月25日	保育観察・保育補助	観察記録のまとめと振り返り	⑫	11月26日	後期振り返り	小論文のテーマ決定
	12月2日	教育実習		⑬	12月3日	小論文と発表プレゼンテーションの作成	
	12月9日			⑭	12月10日	小論文と発表プレゼンテーションの作成	
	12月16日			⑮	12月17日	小論文と発表プレゼンテーションの作成	
	1月13日	成人の日		⑯	1月14日	1・2限:発表会準備とリハーサル	3・4限:論文発表会 於 やわらぎホール
⑦	1月20日	(3園に分かれて)1年間の学びの振り返りと報告テーマの決定					
⑧	1月27日	(3限)報告原稿作成	(4限)報告練習				
⑨	1月31日	(3・4限)1年間の学びの報告会 於:学院内教室					

③ 保育ゼミの時間配分と内容

基礎ゼミでは、授業計画に、実際の保育観察までにガイダンスと準備期間(4月8日～4月28日)を設定して、観察記録をどのように作成するとよいのか意識づけと指導を行った上で、自分なりの目標を立てて取り組ませるようにした。園側の行事や保育計画との調整をコーディネーターが行い、園外保育や遠足等の行事にも引率補助や運営補助として柔軟に協力・対応できるようにしている。

1 限目 (8:50～10:20)	2 限目 (10:30～12:00)
8:50～ 9:10	- 学院でその日のゼミの事前指導を行う。 - 各園に出向いて保育体験を始める前に「保育を見る視点」(子どもの姿・子どもの生活や遊び・保育者の関わり・環境)やその日の保育体験におけるねらいを明確化する。 - 健康チェックを行い、各園に行く。
9:20～10:50	- 園ごとに保育を観察する。(観察実習・環境実習・保育補助等) - 学院へ戻る。
11:00～12:00	- 学院へ戻り、観察記録のまとめやドキュメンテーションを作成し、振り返りと話し合いを行う。 - 各園で実際に見た子どもの姿や関わりについて、「保育を語る視点」を環境構成や保育者の援助などに焦点を当てて、深める。

④ 指導方法の改善と充実

保育基礎ゼミの1年間の取組と3回の実習を経験している2回生において、その経験から幼児理解力がどの程度身に付けられているかを、保育基礎ゼミを半年だけ経験した昨年度の2回生との比較から確かめてみた。十分な幼児理解にまでは至っていないものの、保育を観察する際の視点の当て方や見方が異なることに気付いた。それは、学生が記録として撮影した写真に表れている。むやみに撮影しているのではなく、子どもの表情や行動のよりよく表れた場面が切り取られていることが感じ取れるのである。エピソードを記録したり、保育を分析したりする力はまだ不十分であるが、記録としての価値が感じられる写真が撮影できているのは、保育を見る視点が定まっていることの現れであるといえる。そして、さらに保育観察を積み重ねる中で、視点をもって保育を観察し、幼児の思いや願いを読み取る力が向上すれば、ドキュメンテーションの内容が充実する筈である。このことは、幼児教育における幼児理解の大切さを学生に認識させることに繋がるとともに、効果的な保育補助にも繋がると考える。日々の小さな積み重ねが、確実に学生の資質向上につながると言える。

そこで、今年度は、1回生に保育観察の仕方を丁寧に指導するとともに、記録の書き方やまとめ方について、保育基礎ゼミの事前指導の中でポイントを押さえて指導し、練習する機会をもつことにする。また、毎回のゼミの振り返りの時間には、観察し見取ったことをどのように記録したのかについて話し合ったり指導したりしていきたい。昨年度、初めての実習に行った際に実習先で記録簿の書き方を教えてもらっていないと発言する学生も存在したため、保育ゼミでの観察記録の書き方は実習記録簿の記載方法と基本は同じであること、エピソードの記録はゼミでの保育観察記録としても大切にしたい。つまり、保育ゼミでの取組は、指導の在り方次第で、実習に臨むときの不安材料となる課題の軽減にもつながるものと考えている。

2 観察記録の取り方の工夫と振り返りの充実

観察記録用紙は、昨年と同様に形式を作らず、A4の用紙に日付と時間・場所以外、自由に書き込めるものとし、3～4行程度の振り返りの欄を入れたワークシートを作成した。また、保育を見る視点については、こちらから視点を与えるのではなく、観察者が振り返りの中で、自分はどんな視点で観察したのかということを意識して、気付きと学びを報告し、話し合うことによって、学生の気付きを引き出せるように導きたい。

記録用紙に形式を設定しないことや、保育観察の視点をこちらから提示しない理由は、観察するという行為自体に柔軟性と一人一人の感性が働くようにしておくことで、「こういう点に注意すればいいな。」とか「今日は、幼児のつぶやきを拾ってみよう。」というように、幼児の行動の捉え方や記録の取り方に自分なりの工夫が生まれ、振り返りの場での学びに繋ぐことができると考えているためである。また、イラストを入れたり図式化したりしてもよいということ伝えておくことで、自分にとって分かりやすい記録としての工夫が生まれることをも期待している。

オリエンテーションの際に準備したワークシートには、今年度の自分の目標を記述する欄を

設け、目的意識をもってゼミに臨む姿勢が大切であることを暗に示すようにしている。また、前期末、後期末には報告会や学びの発表会を設けて、学びの成果を各園の先生方に伝える機会をもつ計画である。さらに、2回生には2年間の学びを振り返り、小論文にまとめ発表する「学びの発表会」の機会を設けることにした。このような機会を設けることは、節目で自分自身を振り返り、学びの履歴を確かめることが学びの自覚化につながり、一人一人の自信にもつながると考えている。

保育専門ゼミでは、観察記録をとりながら、タブレット端末で幼児の行動や表情、保育の様子などを写真でも記録する。基礎ゼミで培った観察力によって、幼児の遊びや保育の中で生まれる思いや願いの表出する瞬間や、エピソードの一端を切り取り、ドキュメンテーションにまとめる。まとめた要点を振り返りの時間に交流して、幼児理解を深めると共に保育者の意図や効果的な援助のあり方等についても話し合えるようにしていきたい。このような一連の活動が、スムーズに運ぶようにするため、コーディネーターは、連絡調整やそれぞれのニーズの把握に努めなければならない。また、学院内の教員同士での共通理解（具体的な授業の在り方や評価基準の設定等）と協力関係の構築、指導の充実を図ることにも取り組みたい。

Ⅱ 保育基礎ゼミ・専門ゼミの取り組みの実際

1 学生の幼児理解を確かなものに

◎保育基礎ゼミ（1回生）

<概要>

この授業は保育実践力の養成を目的とする。

同法人内の「奈良保育学院附属幼稚園」「おおみや保育園」「おおみやこども園」の3つの施設で現場体験を行う。年間を通して毎週園に行くことで、季節に合わせた子どもたちの活動や環境構成を理解できるようにする。直接子どもたちと関わるだけでなく現場保育者と共に環境整備等も行い、自身が現場に入った際、必要となる知識や技術の基本を身に付ける。

<到達目標>

- ・ 保育体験を通して幼児教育や保育の様々な課題を知り理解を深める。
- ・ 幼児教育や保育現場の課題を体感し、自分自身の保育観を醸成する。
- ・ 子どもと関わる保育者の職務や子どもの発達過程を観察し理解する。

※1回生は年間を通して3園を順番に経験する。

◎保育専門ゼミ（2回生）

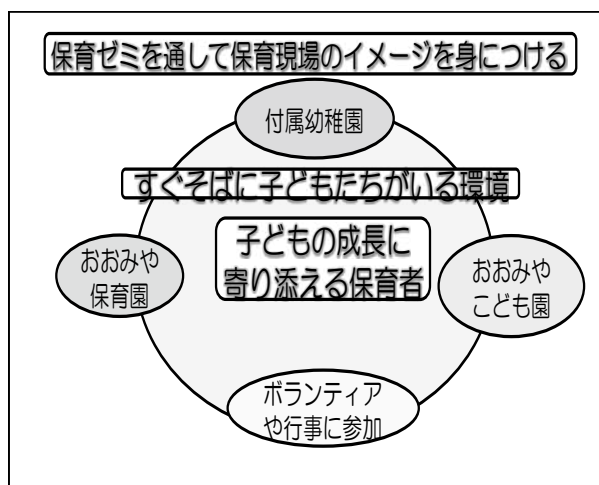
<概要>

この授業は「保育基礎ゼミ」で培った実践力をさらに高めることを目的とする。

同法人内の「奈良保育学院附属幼稚園」「おおみや保育園」「おおみやこども園」の3つの施設で保育体験を行う。年間を通して毎週園に行くことで、季節に合わせた子どもたちの活動や環境構成を理解する。直接子どもたちと関わるだけでなく、保育者の保育補助や環境整備等も行い、自身が現場に入った際に必要となる知識や技術を身に付ける。

＜到達目標＞

- ・自分なりの視点をもって観察することを通して幼児の思いや願いを読み取ったり、保育者の意図を感じ取ったりして自分自身の保育観を醸成する。
 - ・「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」に照らして、幼児一人一人の学びや育ちの様子を確かめ、自分自身の実践力向上に取り組む。
 - ・保育者としての資質向上に主体的に取り組む。
- ※2回生は園の保育計画や保育の流れを深めるため、年間を通して同一園で経験する。



2 保育観察と記録の意義

保育基礎ゼミでは、各園での観察実習や保育補助（後期より）、環境実習など様々な保育体験を通して「子どもを知る」ことから始まる。中でも「遊び」を中心として観察することによって、子どもを取り巻く保育環境の意味が分かり、幼児理解へとつながっていくのではないかと考えた。また、保育専門ゼミでは写真を撮影しながら保育記録をとり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けながら省察し、保育者として「子どもの育ちを意識した働きかけ」とはどのようなものか、ドキュメンテーションにまとめることを通して、子どもの育ちと学びの過程を振り返ってきた。

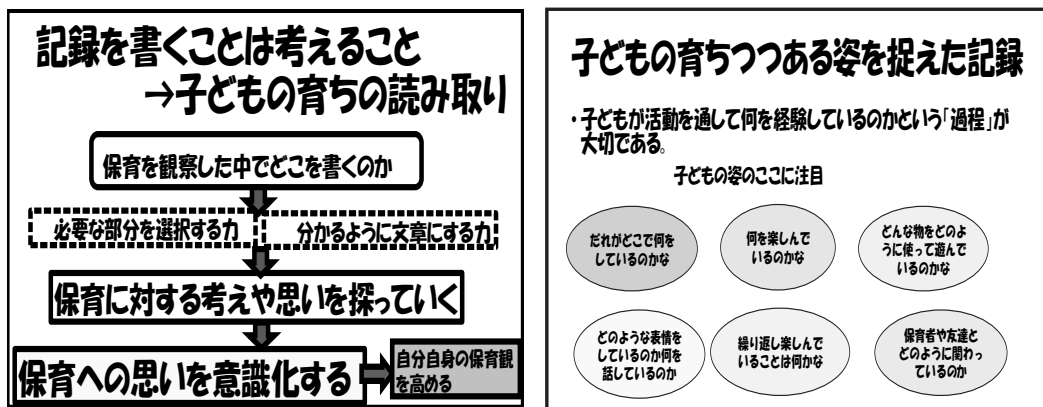
保育記録の出発点となるのは、保育観察を行っている学生自身の心の動きである。日常の楽しいことは誰も記録しておきたくなるのと同じように、日々の保育の中で「こんな姿が見られた」といった驚きや喜びが、記録に向かう際の重要な動機となると考える。

観察記録の方法としては、主にその日の保育の様子を文字や絵、写真で記録する。撮った写真の中から2～3枚プリントしてタイトルを考え、構成していく。

観察する視点として「どの子どもと関わるのか、どんな遊びに関わるのか」は、学生にとっ

て重要な視点の一つである。

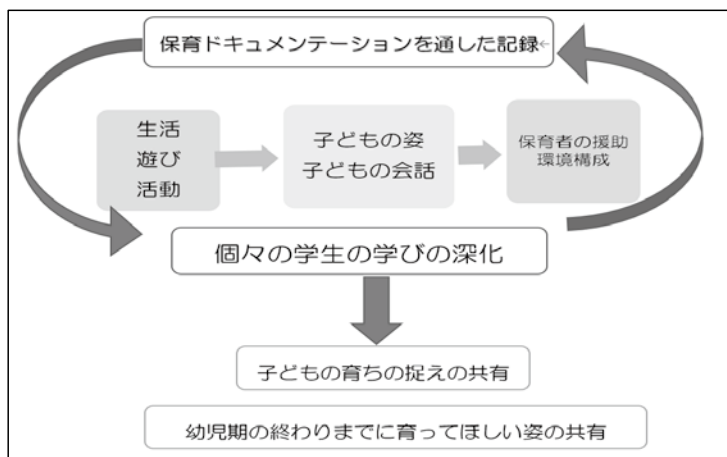
観察記録やドキュメンテーションを通して子どもの姿を見つめ、その姿について考えることにより、保育者の「子どもの興味・関心、学びや育ちをとらえる視点」が育まれていくと考える。子どもの姿や学びが見えてくると、子どもの姿の展開が楽しみになり、保育という仕事の楽しさや遣り甲斐にもつながると思われる。



毎週継続していくことで、学生と子どもたちとの自然な関わりも見られ、顔見知りになることで、子どもたちとの距離も縮まり、子どものことを「わかって」とする学生の幼児理解のきっかけになってきている。

保育専門ゼミでは、保育基礎ゼミで得た学びを基盤に、記録の方法としては写真を活用した保育ドキュメンテーションを作成している。設定された活動や自由に遊んでいる子どもたちの写真を用いて、どのような思いだったのか、写真から読み取れる姿を出し合いながら、話し合う。そして、毎回の振り返りを丁寧に行い、様々な視点で子どもを捉えられるようにすることで、子どもの思いや願いを言葉で表現して話し合い、幼児理解につなげることが大切である。

さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けながら、子どもの経験している内容や育ちと学びの姿、保育の意図や子どもの主体性などを考える。そうすることで、学生の学びがさらに深まり自覚化され、保育者としての資質が高められていくと考える。



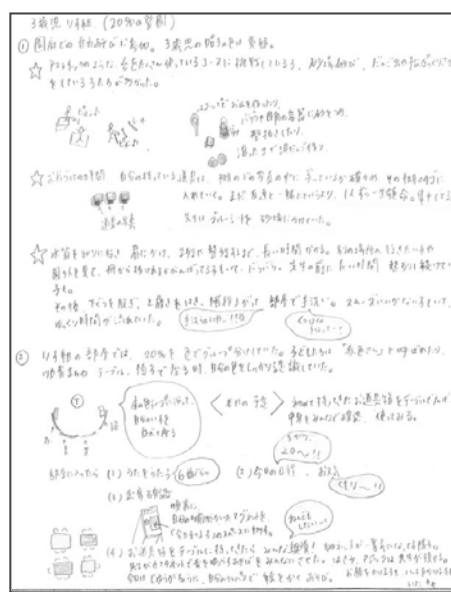
3 保育観察記録の実例

①保育基礎ゼミにおける保育観察記録の実例

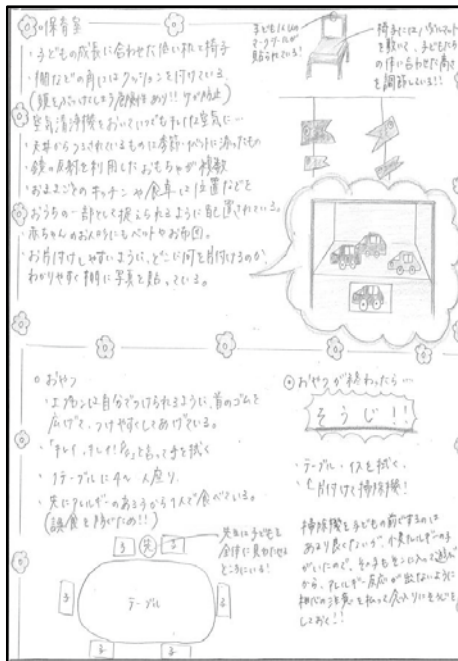
【 5 歳児 】



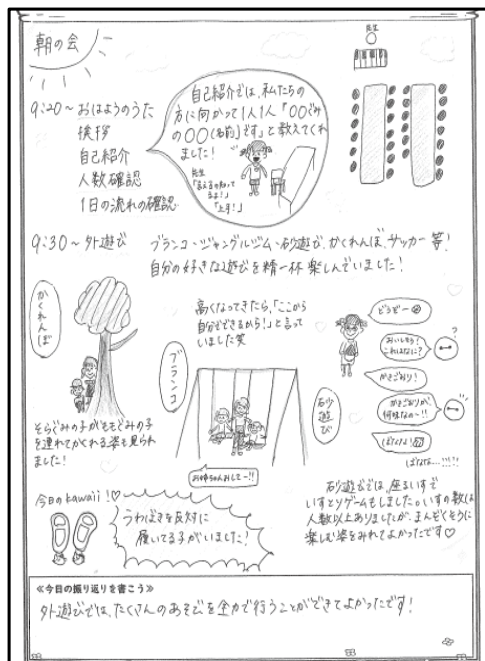
【 3 歳児 】



【 1 歳児 】



【 4 歳児 】



【基礎ゼミでの記録に表された学生の学びや気づき】

- ・子どもの姿や遊びを記録していると、記録として残したいことが次々に出てくる。しかし、それをすべて盛り込むことはできないため「今日は、このことで」と、絞っている。絞った視点が、保育者の意図、子どもの育ちなど保育のねらいかもしれない。
- ・記録の作成時間が30分ぐらいしかないので、子どもたちが体験していることを伝える工夫としてイラストや環境図などを入れ、子どもたちが今どのような状態にあるのか、後で見ても気付ける記録として仕上げている。
- ・乳児の場合は、一人一人の個人差や発達過程に応じた環境や関わりが大事であること、よく観察してみると、一見同じことをやっているように見えることも、よく見てみるとそれぞれ違うことに気が付いた。一人一人に対する幼児理解がまだ十分とは言えないということに向き合わなければならないと感じた。
- ・子どもたちの年齢が上がるにつれ、一緒に遊ぶ子どもたちの人数も増えていく。年齢に応じた保育者の関わりや子どもの主体性を大事にした言葉掛けなど、子どもの内面を理解した関わりは、考えていた以上に難しいと思った。

【 0 歳児 】

【 5 歳児 】

【 4 歲兒 】

【 5 歳児 】

— 12 —

【専門ゼミでドキュメンテーションに表された学生の学びや気づき】

- ・ドキュメンテーションについては、どうまとめたらみんなに分かりやすく見やすくできるのか、写真の位置や、テーマ、レイアウトなど工夫した。
- ・継続して同一園で、子どもの言葉や行動に視点を置いて観察することができ、次に向けての言葉がけのタイミングが分かった。
- ・子どもの視点から物事を捉えることにより、何に興味をもっているのかなど以前より分かるようになった。「10の姿」にあてはめることで経験している内容が分かるようになった。
- ・保育を観察する際、子どもの表情などから気持ちを読み取り、記録することを意識した。
- ・ドキュメンテーションを作成する際に、子どもがつくった作品に対して、子どもの言葉を想像し吹き出しを書いたり、気持ちを表現するのに吹き出しを活かしたりした。
- ・保育者は、子どもたちにどのように育ってほしいと思って行動しているのか、どのような思いで言葉がけをしているのかなど、気を付けて観察することで、10の姿と結び付けて観察できるようになった。
- ・ドキュメンテーションを作成する際に、子どもが発した言葉が分かりやすいように吹き出しの形を変えた。
- ・子どもの姿の何を観察するのか、なぜこう思っているのかなど、子どもの思いを推測することで、より学びが深まった。

4 学生同士の学び合いの実際

①保育基礎ゼミにおける学生の学び合い

- ・毎回、3園のグループごとに振り返りを行っているが、前期末及び後期末には全員でゼミを振り返り、学び合えるようにした。少人数のグループを編成してグループワークを行い、グループで話し合ったことを共有する場をもつ。全員がきちんと活動に参加できるようにするため、グループ編成は3・4人とし、ゼミで行く3園が混ざるよう配慮した。
- ・最初に、各自のこれまでの記録をグループで輪読し合い情報交換を行う。次に付箋を思考ツールとして用いる「KJ法」で話し合った。学生自身が保育観察を通して読み取った子どもの姿、保育者の援助、環境構成を各自付箋に記入し、伝え合った。



- ・一人一人の気づきや学びを紹介しながら付箋を貼り終えた後、共通する視点でグルーピングを行い、その視点でラベリングする。ラベルにどのように見出しをつければよいか、キャッチコピーはこれでよいかなどと質問してくるグループや、協力性が不足しているグループもあり、時には意図的に突っ込んだ質問をし、確認をするなどして関わるよう配慮した。
- ・積極的な学生と消極的な学生の差が見られるため、最初からグループ単位で活動するのではなく、まずは自分自身の気づきや学びを記入してから、交流するようにした。
- ・グループの学び合い（「KJ法」）の振り返りとして、学生から出てきた主な感想は、以下の通りである。

- ・各自、学んだことをまとめたことによって、改めてどのようなことを学び、何が不足していたのかを確認することができた。
- ・子どもとの関わりにおいて、様々な場面でどのように向き合うべきか今後も考えていくことが必要である。
- ・子どもの年齢による違いを知り 年齢に応じた保育者の援助や配慮の仕方を感じることができた。
- ・各自、学んだことをまとめたことによって、改めてどのようなことを学び、何が不足していたのかを確認することができた。保育者の援助や配慮の仕方を感じることができた。
- ・グループのメンバーと協力し、意見を出し合っていくことで、各々の考えを深めていくことができた。
- ・各自、学んだことをまとめたことによって、改めてどのようなことを学び、何が不足していたのかを確認することができた。
- ・子どもとの関わりにおいて、様々な場面でどのように向き合うべきか、今後も考えていくことが必要である。
- ・子どもの年齢による違いを知り 年齢に応じた保育者の援助や配慮の仕方を理解することができた。
- ・グループのメンバーと協力し、意見を出し合っていくことで、各々の考えを深めていくことができた。

以上のようにして、学生全員が、各期の保育基礎ゼミでの学びを振り返り、成果と課題を明らかにするとともに、それぞれが得た学びを報告するために、テーマを決め報告することとした。報告会では、各園の先生方から具体的な指導を得ることができた。

② 保育専門ゼミにおける学生の学び合い

保育ドキュメンテーションの写真は、幼児が何を考え、何を体験しているのかエピソードを記録する手段である。回を重ねる中で、次第に状況がよく分かる場面を写真に収めることができるようになってくるとともに、視点を定めてドキュメンテーションを作成できるようになってきている。しかし、全体を漠然と観察し、保育補助をする中では、子どもの行動や思いに気付く力、読み取る力を分析するまでには至らないのが現状である。毎回のゼミでは、限られた時間でのドキュメ



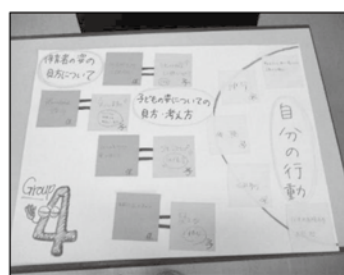
ンテーションの作成となるため、3園ごとのグループでの振り返りにとどまっていた。そこで、前期のまとめの段階で、各自、お気に入りのドキュメンテーションを選び、書画カメラを通して内容について報告した後、付箋を思考ツールとして用いる「KJ法」でグループワークを行った。

グループは、学生を3～4人ずつのメンバーとし、園が偏らないように編成した。学生自身が保育観察を通して読み取った記録やエピソードからの学びや自分自身の成長と課題等を付箋に書いて出し合った。出し合ったものを似通った内容でグルーピングして、見出しを付けてわかりやすくレイアウトし、報告会につなげていけるようにした。この方法を用いると、一人一人が付箋に自分の意見を書いているため、他の学生の意見を自分とを比べながら受け止めることができる。似た意見をまとめて付箋をグルーピングし、カテゴリーごとに見出しを付けてまとめたりレイアウトを考えたりする作業も楽しく取り組んでいた。

次に、グループで話し合ったことを伝え合った。学生全員で質疑応答を行うことによって、共有した情報をさらに深めていくことができた。また、グループ内での話し合いでは、学生一人一人が、自分にはない見方・考え方に触れ、視野を広げる機会となった。同じ体験をしてもそれぞれ観察した視点が異なるため、「KJ法」は、学生の学びを次のステップに繋ぐために有効であるといえる。しかし、各グループの状況としては、メンバーが揃わない、協力的でない学生も存在するなどの理由で、最終的に短時間で仕上げるグループもあり、グループによって温度差があった。また、グループによっては、授業を休んでいた消極的なメンバーにラベルをきちんと出すよう働きかけて、協働で作成しようと努力する姿も見受けられた。

このように、全員での振り返りは、次の課題を明らかにする手段として有効であった。また、各園のグループ内だけでなく全体で共有することで話し合いの内容も深められていった。前期のまとめとしての学生の気付きは、課題を明らかにするきっかけになったと思われる。

このようにして、学びを振り返ったことで自分自身の学びを自覚化することができた。そして、報告会に向けてテーマを設定してまとめたことを報告し、指導を受けることができた。



5 保育基礎ゼミ・専門ゼミの報告会

- 目的 ・前期の保育ゼミを振り返り、学生一人一人が学びの成果と課題を明らかにする。
- ・グループで学びの成果を出し合い、話し合うことを通して、それぞれの保育観を高める。
- 内容 ・3園に分かれて、保育ゼミの学びの成果と課題を発表する。
- ・各園の保育者から、保育をみとる視点や保育の見方だけでなく、保育者としての心構えなどについてアドバイスや指導を受ける。
 - ・保育者の方からいただいた指導を基に、自分自身の新たな目標を設定する。
 - ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手掛かりに、幼児の成長の様子を捉えられるようになるためには、保育をどのように見るとよいのか、保育者の立場からアドバイスをいただく。

① 報告会までの主な流れ

- ＜1回生＞ 7月8日 各園グループでの保育観察
施設ごとのグループで事後指導を行う。
保育ゼミのワークシートに振り返りを記入し報告テーマを決める。
- 7月11日 前期の保育ゼミで学んだことをグループで交流し合う。
- 7月16日 午前：報告会の発表原稿を確認し、前期の学びと自分自身の課題を出し合う。
午後：各園に出かけ、各自学びと成果を報告する。
- ＜2回生＞ 7月9日 各園グループでの保育観察
施設ごとのグループでドキュメンテーションを作成し交流する。
保育専門ゼミのワークシートを仕上げ、報告会のテーマを決める。
- 7月16日 これまでのドキュメンテーションのファイルをグループで輪読した後、各自のお気に入りを選ぶ。
お気に入りの交流と前期の自分自身の成長と課題や保観観について話し合う。
報告会での発表原稿を仕上げる。
- 7月24日 各園に出かけ、各自の学びと成果を報告する。

② 基礎ゼミ・専門ゼミの報告会

各園での報告会では、学生たちが、どのようなことを感じとったり学びとったりしたのか、要点をまとめたものを発表し、その内容に対して園長先生や主幹教諭からコメントやアドバイスをいただいた。

報告会という場をもって一人一人の学びを伝えたことは、それによって学生たちが自分の考えを深めたり、自分とは異なる見方・考え方に触れたりすることに繋がり、多様な見方・考え方を受け止めることの大切さに気付くことが出来るようになることが分かった。また、記録

をもとに自身の保育観や保育実践を見つめ直していくことの大切さも、学生たちは感じ取れたのではないかと考えている。



《2回生の報告テーマ（前期）の例》

おねえちゃん、遊んでくれてありがとう	
手遊びはやっぱり大事！	
保育者としての視点をもつ	
知ること大事、発見たくさん！	
保育の声掛けの重要性	子どもと関わり学んだこと
子どもにとって一番の保育ができるように！	子供が安心できる保育
ワクワク・ドキドキから始まったこども園	専門ゼミで学んだこと
子どもと保育者の信頼関係	園での生活
こども園をとおして	保育者の子どもへの関わり、言葉掛け
子どもへの声掛けの大切さ	保育者の「援助の大切さ
子どもの主体性	保育者の子どもへの関わり
保育者の声掛け	乳児保育
	子どもとの関わりと自分自身の成長
	保育における楽しい遊びの広げ方



報告会についての学生の振り返りから、記録やドキュメンテーションを作成して終わりにせず、グループで振り返りをする事で、様々な角度での見方や考え方があることに気付いていること分かった。また、ドキュメンテーションは、写真を通して子どもの活動過程を「見える化」し、子ども理解を深められる効果があると言える。

保育ゼミでは、毎週子どもと関わる事ができるため、季節による環境の変化や季節感の感じられる子どもの遊びなども理解できていた。また、子どもの姿を常に意識することで、子どもがなぜそのような言葉を発したのか、動きや表情を読み取ることで、子ども同士の関係性や、保育者と子どもとの関係性なども理解できるようになったことなどが、学生の振り返りから読み取れた。

今回の報告会は、一人一人の学生の今後の目標や課題に対する姿勢につながり、自らが目指す保育者としての資質を高めていくことにつながったといえる。

保育園での報告会終了後、園長先生から保育園でもドキュメンテーションを通して研修していることを教えていただいた。子どもの育ちを省察し、幼児理解を進めていくことがとても大切であると言われていた。保育の省察では、悪い面に注目するのではなく、子どもの成



【 おおみや保育園で作成された保育ドキュメンテーションから学ぶ 】

長を語り合うことで保育が楽しいと感じ、子どもの魅力を発見する力になっているということである。また、ドキュメンテーションは、保護者を巻き込み対話が広がっていること、写真を通して伝わる内容に深みが生まれることなど、保育現場での取組と効果を教えていただいた。このような園との密接な連携と協力体制は、理論と実践を結びつける格好の場であり、充実した保育実践の継続と教育環境は、保育・幼児教育の専門家としての豊かな知識とより確かな実践力の向上をもたらすことに繋がるものと考ええる。

保育実習、教育実習（第1段階）を経験した1回生は、1年間基礎ゼミに取り組んできたことによって、どのような学びがもたらされたのであろうか。教育実習終了後（12月）に実施したアンケートに表された、基礎ゼミに対する学生の評価は以下の通りである。

- ・基礎ゼミで子どもと関わってきたので、実習で子どもと関わる際、関わるタイミングがつかめた。
- ・トラブルの際の対処が自分なりにできた。
- ・ゼミで5歳児に関わった経験があったので、5歳児の製作の説明の仕方が役に立った。
- ・ゼミでいろいろな年齢の子どもたちに関わってきたので、年齢ごとの接し方、保育者の話し方のイメージをもつことができた。
- ・ゼミで子どもたちの様子を記憶し、あとで記録をまとめることで、記録を書く練習になった。
- ・子どもの生活の流れを知ることができた。また、保育者の子どもたちへの接し方を見ることができ、遊びや生活の場での声掛けが分かった。
- ・保育者の環境構成の意図が理解できるようになった。
- ・担当の年齢と同じ年齢の子どもたちに関わっていたので、部分指導で活動を考える際、事前に考えておくことができた。
- ・一日の保育の流れがなんとなくわかっていたので実習記録を書くのに活かせた。
- ・毎回ゼミの後で、記録を書いていたので、実習記録がスムーズに書くことができた。
- ・実習の記録の書き方、特に保育者の援助の書き方が書けるようになった。

- ・メモの取れない状況でも必要な部分だけを記憶していると、スムーズに前後に行っていた活動とつなげることができたのは、ゼミでの記録の経験からである。
- ・園や保育室の環境を見て、保育者の意図を学ぶことができた。
- ・子どもの活動のどこを見ればよいか、ゼミで記録の練習をしていたので記録簿でも活かすことができた。
- ・花プロジェクトを経験していたので、実習先で花植えの際、保育者の立つ位置や活動の流れが予想できた。
- ・ゼミで活動の流れの時間を見る癖がついていたので、それに合わせて保育者がどんな動きをしているのか観察の視点がもてた。
- ・ゼミで毎週子どもとの関わりがあったので、積極的に子どもたちと関わることができた。
- ・ゼミの記録の積み重ねが実習記録簿につながり、記録を書く時間が少なくなり、睡眠時間も普通にとれた。また、子どもとの関わり方、目線を合わせることで、保育の関わり方、保育者の年齢別の声掛けの仕方、意図、環境構成のねらいなど自分なりに考えることができた。
- ・子どもとの関わりの中で、見守るべきか、教えるべきか戸惑うことが多かったので、次のゼミの時はそのような視点をもって学んでいこうと思った。

アンケートから読み取れたことは、子どもの様子、遊びの様子、園生活の様子、幼児の実態（その時期の特徴）、環境構成、保育者の思い、保育者の関わりなどが実習の参考になったということである。実習前の11月の遊びの様子の観察と関連付けて、「実習中にも実習園で同じような遊びが続いていて、遊びの連続性を感じた。」「その時の子どもの姿と実習中の子どもの姿が結びついて幼児理解の手助けになった。」など、子どもの姿を重ねて考えたり捉えたりする記述もあり、基礎ゼミでの体験が学生の学びとなり、実習に活かされていることが分かる。反面「子どもたちの状況に応じて、保育者がどのように関わりを行っているのか、具体的にイメージすることが難しい。」「この時期の子どもたちにどんな援助をしているのか年齢別に具体的に考えることが難しい。」など、具体的な援助に関する記述も目立った。実習終了後の保育基礎ゼミでは、実際の様子から具体的に学ぶことと、振り返りを通して理解したり保育者の思いや考えを知ったりすることの重要性にも言及されていた。保育ゼミでは、観察して記録をとるという基本からスタートしたが、より一層幼児理解の大切さを学生が実感できるように導きたいと考える。

1月31日には、1回生の後期基礎ゼミのまとめとして、報告会を実施し、学生一人一人が後期のゼミでの学びを振り返り、成果と課題を明らかにするとともに、専門ゼミへの期待感を高めた。

③ 専門ゼミにおける「学びの発表会」

- 目的
- ・ 2年間の学びを振り返り、自分自身の成長や考えたことなどを中心に論作文にまとめることを通して、自分が身に付けた保育実践力や学びによって得られた保育観等を確認する。
 - ・ 得た学びを文章にまとめることを通して、自己の学びを自覚化するとともに、価値づけて、達成感を味わう。
 - ・ 自分の学びをまとめることを通して、保育者としての自覚をもち、社会人としての責任感と使命感を高める。
- 内容
- これまで作成してきた保育観察記録やドキュメンテーションを振り返ることを通して、自分が得た学びを再確認し、保育者としてどうあるべきか、また、これから自立した社会人として自分の理想の姿に近付くためにどのようなことに挑戦していくのか考えられるように導く。

書くことが苦手な学生が意欲をもって書き進められるようにするために、段階を踏んだ振り返りを行うことを計画した。まず、前期の振り返りと同様に、後期を自分の立てた目標に照らして振り返り、後期の専門ゼミを通してどこまで自分自身が成長できたか自己評価する。次に、自分の作成したドキュメンテーションを見直して自分の学びを洗い出し、「KJ法」でグループワークを行い、2回生全員で共有する場をもつ。前期にはこの段階で、報告会での自身の報告テーマを設定したが、今回は2年間の学びを振り返るため、自分自身の得た学びを価値づけるための作業を入れることにした。

これまで保育ゼミの振り返りの際に、「幼稚園教育要領解説」や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」及び「保育所保育指針解説」で確かめる作業を行う時間的余裕がなかった。そのため、この段階で1年間を振り返り、自分自身が得た学びの一つ一つが、これらの解説書に書かれた「五領域」の目標や内容のどこに書かれている事柄に当たるのかを書き出すことにした。この作業の中で学生たちは、自分の得た学びがすべて「五領域」で目指している保育内容と繋がっていることに気付くことができ、自分が観察して見取ったことが、幼児理解や保育者の援助内容に繋がることを確認することになった。そして、これまで学んだことが、自分自身の保育者としての資質・能力の向上に繋がっていると実感でき、2000字程度の論作文にまとめることへの抵抗感を低くすることに繋がったといえる。

普段書くことに苦手意識をもつ学生は、レポートやワークシートへの記述が雑になったり詳しく表現できなかつたりしがちである。特に実習記録簿への記載には苦勞が伴い、1日の記録をまとめるのに数時間を要している姿が散見される。そのため、学びの発表会に向けた準備が間に合わなくなることも予想された。しかし、実際に取り組んでみると、2000字論作文の下書きの完成に時間を要した学生もあったが、欠席しがちな学生以外は、概ね順調な仕上がりとなった。段階を踏んで指導することの効果を実感できることに繋がった。そして、この後、2～3ページのスライドを作成して自分の学びを発表した。



Ⅲ 3園の行事や活動での連携とコーディネートの実際

1 「花いっぱいプロジェクト」

「花いっぱいプロジェクト」は、毎年行われる保育学院としての活動である。各園の園児と一緒に実施してきており、定着している活動である。この活動を保育ゼミの活動として実施するために、年間計画の中に位置付けた。そのため、実施時期をいつにするのか等について、新年度が動き出すまでにコーディネーターが調整している。そして、春の「花いっぱいプロジェクト」は2回生が専門ゼミの活動として実践し、秋の方は1回生が基礎ゼミの活動として実践する。3園それぞれの保育計画や行事予定、施設面での保育環境には違いがあるため、細かい点については各園で考えていただくが、園児に対する動機付けや苗の植え方の説明および植え付けについては学生が主体的に実習させていただいている。

1年間の保育ゼミの経験のある2回生は、園児の意欲を引き出すためのテクニックがなかなかまいなあとおわせてくれた。「あなたのおなまえは」という歌を使って、一つ一つの花にも名前があることを意識づけたり、植え方のポイントを絵に描いたものを使って説明したりして、場の雰囲気づくりや視覚による援助など、学んだことを活かしていた。また、おおみやこども園では、花の苗植えと畑への苗植えを同じ日にできるように計画され、時間的な効率面を考えておられることが感じ取れた。

計画段階でのコーディネーターの動きが、連携した取り組みの充実にも繋がることから、年間を通じて、いつ頃どのような動きが必要かを洗い出しておくことも必要である。



2 遠足や園外保育での引率補助

前期の計画段階では、おおみや保育園とおおみやこども園の園外保育と遠足が引率補助の機会として保育専門ゼミに位置付けられていた。そのため、クラス別の行先や行程、経路等の詳細についての打ち合わせを行うとともに、学生をどのように動かすかという学院側の計画を取り急ぎ立てることが必要となった。また、園児がバスを利用することに伴って、学生の動きをどうするのか、バス代等の費用負担をどうするのかという課題も見えてきた。

そこで、学生はできるだけゼミの時間内で引率補助を行うこと、バス代等の費用は学院の方で後日精算してもらうこと等、基本的な条件を整えた上で、学生の動きや行先の配当を考えることにした。今回は保育園とこども園の行事であるため、保育園グループとこども園グループをそれぞれ引率先のグループに分けて、引率補助にあたるようにした。



後期には、まず保育園の遠足が専門ゼミの日に実施されることになっていた。前期と同様に、保育園グループを行先別に分けて、引率補助を実施することにした。天王寺動物園に公共交通機関を利用していく計画であったため、授業の取り扱いに対する配慮をお願いした。昼食の取り方を変更することで、授業に間に合うように計画できた。本来ならば、全面的に同行できるようにするべきなのかもしれないが、午後の授業科目の時間を確保することを優



先した。

10月22日、保育園の3歳児 柏木公園キッズパーク、4歳児 東大寺大仏殿、5歳児 天王寺動物園の遠足の引率補助をさせていただいた。遠足の引率で学生に任された主な仕事内容は、バス乗車の補助、安全面を配慮した歩き方・見学の仕方、休憩ポイント等でのトイレの補助、昼食の補助であった。多くの人数を引率する上でのマナーなどをさらに細かく考える必要があると実感した。実際に体験することで初めて気付くことが多く、学びの多い一日となった。

【参加した学生の学び・気づき】

- ・遠足の引率を行った学生の保育者の側から見た保育活動で気付いたこととして先生の声かけの工夫である。例えば、子どもたちに気を付けて欲しいことや注意する時は声を低く、楽しいことや明るい話は声を高く明るく出していた。
- ・子どもに大切なことをたくさん伝える時に、話の途中で「まだ聞ける？」と声をかけたり、子どもが集中できるように受け答えをしたりする保育者の姿があった。
- ・保育者同士のチームワークである。常に保育者同士で他のグループと情報交換をしたり、子どもたちの手が離れる合間を利用して次の行動の計画を再確認したり、相談をしたりしていた。
- ・保育者の子どもに対する観察力である。少し疲れた子の様子やバスで少し体調が悪い子にすぐに気付き声をかけていた点である。
- ・子どもたちの様子について気付いた印象的な点は、子どもたちが予想以上に協力し合い、いろいろなことが自分でできていたことである。他には、自分でできることは「自分でできるよ。」と自分の気持ちをしっかりと伝えられた点である。自分でできることは自分ですするという指導が日頃から園で行われていることにも気付き、普段の生活の中での指導の大切さも知ることができた。

付属幼稚園の「森の幼稚園」が2学期に7回計画されていた。複数回の実施となっていることから、幼稚園グループの学生にはどのように引率補助をしてもらうことが適切かを検討した結果、時間割を一部変更して11月19日の1日を運営補助に充てることになった。そして、園児がバスから降りるキャンプ場への入口で待ち合わせ、安全にキャンプサイトまで行けるよう、安全確保に努めた。また、学生は、キャンプフィールドでの活動が円滑に進められるよう、安全面に気を配りながら、一人一人に応じた援助に努めた。



園外の公共施設を活用した保育は、どのようにして安全安心が確保された環境で行うかという点が課題である。一人でも多くの支援者が存在することで、子どもも保育者も活動に没頭し楽しむ事ができると感じられた。

3 運動会の運営補助

① 保育園運動会

9月28日（土）白藤学園おおみや保育園の運動会が、本学体育館で開催され1回生の有志6名が、ボランティアとして運動会の運営補助を行った。1回生は、毎週月曜日に保育基礎ゼミで保育観察、保育補助をしており、運動会に至るまでの過程を見てきている。今回は、運動会における保育者の役割を体験して、子どもたちの成長を感じることができたようだ。



【参加した学生の気づき・学び】

- ・すべての園児への応援や後片付けなど、保護者の方も協力的で、みんなで運動会を作り上げようという気持ちが伝わってきた。運動会の実施には、たくさんの人の力が必要だと実感した。
- ・実習で運動会に向けての活動の過程を見ていたので、子どもたちの練習の様子から成長を感じることができた。
- ・当日、子どもたちの一生懸命頑張る姿を見て、全力を発揮できるような環境を構成する保育者の援助が、いかに重要か学んだ。
- ・自分たちが拍手や手拍子をすることで、保護者の方も協力してくださり、運動会全体がより盛り上がった。
- ・子どもたちが一生懸命走ったり楽しく踊ったりしている姿を見て、将来、自分も子どもたちが楽しめるような保育ができる保育者になりたいと思った。リレーで転んでも最後までゴールに向かう姿や次の走者にバトンをつなぐ姿に感動した。改めて、子どもの可愛さや子どもの一生懸命な姿をととても素敵だと感じる事ができた。子どもが更に大好きになる一日だった。
- ・自分の出番になると張り切って笑顔で頑張っている輝いた子どもの姿を近くで見守ることができて本当に良かった。

学生は、プログラム進行の補助を通し、子どもたちの競技や演技に臨む姿を身近で感じる

ことができた。また、運動会での保育者の姿から、将来、自分たちが働く際の具体的なイメージをもつことができた。今回のボランティアを通して、直接園児と触れ合うことの楽しさを味わうと共に、園の行事運営に関わることができ、貴重な経験となった。

② こども園運動会

10月5日、2回生の学生4人がボランティアで運動会の運営補助として参加した。年間を通した保育専門ゼミだけでなく、6月の教育実習でも子どもたちと関わりがあり、運動会に至るまでの子どもたちの姿を見てきている。そのため、この活動を通して運動会における保育者の役割を、経験を通して学ぶとともに、子どもたちの成長を感じることができた。



【参加した学生の学び・気づき】

- ・プログラムを決定する場合には、子どもの年齢だけで決めずクラスの特徴や園児の個々の発達状況にあわせて、どのようなプログラムにするのか、いつごろから内容を決めていくのかと思った。
- ・年長児のダンスでは、『ダイナミック琉球』という、とても壮大で胸に響くような素晴らしい歌に合わせ力強い踊りになっていた。何回か専門ゼミで、練習の姿を見た。子どもたちの「こうしたい」「こんなふうになりたい」という気持ちをみんなで話し合っている場面を見た。日頃から、子どもたちの声に耳を傾け、興味・関心をつなげていくことが気持ちを盛り上げていくと感じた。
- ・子どもたちには、準備や片付けをしたり、プログラムの進行の紹介をしたりなどの役割もあった。年長児が役割をもつことで運動会への取組に意欲がわき、友達と力を合わせる大切さ、楽しさを実感できたのだと感じた。
- ・ボランティアとしては、事前に役割などを把握しておく必要があった。道具を出すタイミング、安全面への配慮、片付けのタイミングなど事前に打ち合わせのお願いをしておくことが大事だと思った。

③ 付属幼稚園運動会

10月26日（土）、付属幼稚園運動会に1回生5名・2回生4名がボランティアで参加した。多くの家族の方の応援を受け、子どもたちの笑顔と先生方の真剣さを肌で感じた運動会で

あった。運動会のプログラムに沿った準備や片付けなど、事前に打ち合わせをしておいたことで、チームワークよく進めることができた。



【参加した学生の学び・気づき】

- ・ 今年は、オリンピックの年であり、子どもたちの運動会も「ジェシカオリンピック」と命名され、内容も子どもたちと考えられていて、わくわくした運動会であった。
- ・ 普段、遊びの中で年齢の枠を超えた交流があるので、運動会の内容の中にもお互いを応援する姿が見られた。
- ・ かけっこや跳び箱など、うまく出来た友達に素直に拍手を送る姿と、一生懸命している友達を応援する姿が印象的であった。
- ・ 頑張ってきた練習、力を出し切った本番当日の子どもたちの姿を見て、来年の今頃は自分も保育現場でこのように子どもたちとともに頑張っているのかなあと「保育者」に近い目線で参加できた。
- ・ 普段と違う雰囲気であるため、なかなか集中できない子に対しての声かけの難しさを痛感する場面があった。ただ「～しなきゃ。」「～する時間だよ。」ということ言うだけでは、その時だけは集中しても、すぐに集中がされてしまうということを経験した。演技前は、「注意をする」のではなく、子どもたちに興味をもたせていくような言葉かけを心がける必要性を感じた。

4 ボランティアやアルバイトの要請

付属幼稚園とおおみやこども園には、預かり保育の時間がある。この時間の人手不足を補うためのアルバイトやボランティアの要請、夏期・冬期・春期休業期間中の預かり保育のアルバイトの要請が主なものである。また、保育園では、休日に行われる夏祭りへの協力要請もある。

これらは、保育ゼミの時間とは全く異なる活動であるが、要請に応じてコーディネーターが学生に呼びかけ、人員を確保するようにしている。その理由は、就職活動にも役立つ経験となると判断しているからである。預かり保育の時間に拘わると、お迎えに来られた保護者にどの

ように対応されているのかということを目の当たりにすることができる。学生が直接保護者と関わることがなかったとしても、この時間帯における保育者の姿に触れることができることは、貴重な体験である。ボランティア経験の大切さや必要性を感じ取り意欲的に取り組んでみようと学生を増やしていきたい。

IV 成果と課題

1 成果

① コーディネーターの必要性

保育ゼミでの取組を、3つの系列園の協力を得て取り組むためには、それぞれの思いをつなぐためのコーディネーターの存在が必要であることが確認できた。互いに得るものがあるからこそ、協働性が育まれていく。また、学院内でも3グループ間の情報共有や毎回のゼミでの留意点等を確認して、活動する必要がある。気付いたことを忌憚なく出し合い情報は共有し合うために、今後もフットワーク・ネットワーク・チームワークの「3ワーク」を大切にしていきたい。

② 振り返りの大切さ

成果を急がず、学生の成長をその姿から読み取り、思いを引き出しながら育てる姿勢を指導者が心がけることが必要であるとわかった。事後の振り返りの場において学生の気付きを引き出し、指導者はワークシートへの記述を丁寧に分析的に評価していくこと、良さを認めるコメントを入れることを今後も疎かにしないようにしたい。また、学生一人一人が自分自身の目標を設定して取組み、振り返ることで、次の課題への意欲がもてるようになると実感できた。

③ 学生同士のグループワークや対話の効果

全員参加を可能にする手法の活用や、一人一人の思考を促す手立てを工夫しながら学生の思考力や文章表現力、創造力を高められるよう、指導者も向上心をもって指導に当たりたい。そうすることによって保育者としての基礎力が徐々に育成されることが分かった。

④ 報告会や発表の機会をもつことの効果

節目での報告会や発表会をもったことで、自分自身の成長を学生は自覚し、次への意欲をもてるようになっている。報告会の場で、一人一人へのアドバイスを受けたことによる向上心の芽生えは、子どもへの接し方の変化に繋がっていた。また、2年間の学びをまとめて自分自身の成長を確かめることは、就職という節目を迎える際の自信に繋がると感じた。どちらから言えば自己肯定感の低い学生ほど、論作文をまとめるためには苦労があるが、この作業を経て得られる達成感、社会的自立を促すために必要な作業であるといえる。

2 課題

① 保育ゼミにおける学生の専門性の向上のために

振り返りの時間が大切であるため、時間の確保が欠かせない。限られた時間のなかではあるが、時間を確保できるよう工夫をしていきたい。保育ゼミの午前中の2コマをどのように区切るか検討すること、保育観察記録やドキュメンテーションをヨン作成の効率化を考えていきたい。

② 保育ゼミ指導者の資質の向上

学生の専門性の向上には、指導する者からの支援やアドバイスの在り方等が問われる。学生の学びの充実を図るためには、振り返りの場に出てくる問いや疑問等に、適切に答えることや、保育観察記録やドキュメンテーションへのアドバイスや評価等の在り方も大切である。学生が作成した成果物に対しては、良さを認めたり、視点の置き方を具体的にほめたりというように、保育の見方・考え方や幼児の成長のとらえ方等の良い点をしっかりと抑えて認めることが専門性の向上につながると考える。そのため、学生を指導する者も自らの保育を見る力や、学生へのアドバイスの仕方等の向上を目指していきたい。

③ 目指す学生の姿の共有

学院内では保育ゼミの年間計画を、指導する教員間で周知して授業に取り組んでいる。一方、協力してくださっている3園でも、学生がゼミを通してこんな保育者に育っていったくれたらという思いをもってくださっているのではないかとと思われる。計画段階でそこまでの話し合いをせずに取り組んできていたことに気付いた。そのため、次年度の計画を立てるにあたり、どのような姿にまで育ってほしいのかという思いやゼミでの育ちに対する期待感など、互いに出し合い、共に育てるという意識で保育ゼミを行っていけるようにしたいと考えている。単に学びの場を提供していただくことにとどまらない連携を、今後目指していきたい。これこそがコーディネーターの役割だと考える。

おわりに

1年間を通して保育観察記録を作成し、保育を見つめ考えることによって、学生の保育実践力が高められることが実感できた。何事にも効率の良さが求められる現代社会において、地道な努力を要する取組であるが、保育者としての基礎的な資質・能力を身に付けるためには日々の丁寧な取組が大切であるということが言える。

系列3園との連携が軌道に乗った今年度は、学生の明らかな成長ぶりがとらえられ、一層の指導の充実が求められることとなっている。観察記録やドキュメンテーションといった見える成果物からとらえることのできる面だけでなく、資質・能力として内面に身に付けられていく力を育むことを念頭において、これからも計画的に取り組んでいきたいと考えている。

保育専門職を養成する本学は、今後も保育実践力の向上に向けて一層の取組を推進していく所存である。以上述べてきた取組の成果は、系列3園のご理解とご協力の賜物である。紙面をお借

りして厚く御礼申し上げるとともに、今後も一層緊密な連携と協働を推進していけるよう心より
お願い申し上げます次第である。

参考文献

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説、

厚生労働省（2018）保育所保育指針解説

内閣府、文部科学省、厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

小学館（2020）日本版保育ドキュメンテーションのすすめ

新評論（2018）スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用

Gakken保育Books（2024）ドキュメンテーション・ポートフォリオ・保育ウェブ・対話 保育の質
を支える仁慈保幼稚園のツールたち

西東社（2023）役立つ！生きる！保育ドキュメンテーションの作り方